



00

R-18

Kaito x Ran  
Detective Conan



ねえ脱いでも  
いいかな…?

蘭ちゃん  
可愛い♡



快斗くん  
この格好は……



だめ……!!  
せつがくの  
男のロマンがー!

ろまん……



ニカッ

今日はこの格好の  
まましょっか!





やっば蘭ちゃんの  
おっぱいやらけー

やあんっ

ああっ

何度触っても  
ほんとたまんね……



もう快斗く……んっ  
胸ばっかあ……っ……

だってこんな  
気持ちいいんだもん▼

っひあ▼

触るなっていう方が  
無理だよ蘭ちゃん





やあんっ!

もうこんなに  
先っぽ硬くしてさ  
蘭ちゃんの  
エッチ♡



前から  
頂きます

やっ  
やめい...

おにい

あはは



いっおおお

あはは

あはは



そんな吸っちゃ  
だつためえ...

ははは

ははは

ははは



やっあっんあっ

ははは

ははは

ははは

ははは







蘭ちゃん俺にも...

んっ...



んっ... あんっ

んっ... っ



んっ...

んっ



んっ... やあ...



そうそう  
上手いよ  
蘭ちゃん...

たまんね...

快斗君の  
熱くて硬い...  
これがいつも  
私のなかに...





あつあつ... やつ  
そんな  
激しくしちゃう...

あーっ

やつ!  
かつかいと  
くん...



あつあつ...  
あーっ

あつあつ...  
あーっ

蘭ちゃんのナカ  
すげー気持ちいいよ...





らんちゃん……

蘭……ちゃんっ  
蘭ちゃん……っ

あっ！あっ！あっ  
かつ快斗くんっ……んっ  
快斗くんっ……！！

あ……

あ……



やっそ……  
だめえ……っ

あ……あ……



え……っ  
かつ快斗くん……っ

……蘭ちゃん  
もっとなしたい……っ

あ……

あ……

穴埋めらくがき  
海に行った快蘭ちゃん。



快蘭ちゃん  
海に行った  
穴埋めらくがき

曜日

蘭ちゃん昨日も  
エロかったなあ...

しかも...

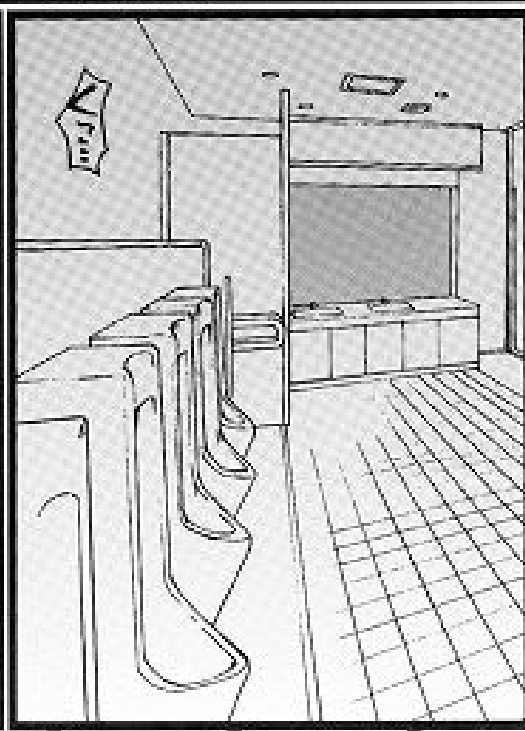
そう...  
そのまま腰を  
落としてみて...

じ...じ...  
...じ...

あ...あ...  
あ...あ...

そうそう  
上手いよ...

イイ眺め...





蘭ちゃん…っ



…はっ



あつあんっ  
かいとくうん…っ  
焦らさないでネ…

蘭ちゃん腰が  
動いてるよ♡  
そんなに俺の  
コレが欲しい？

…っ…やあ…  
おねがいだから  
はやくいれてえっ…



ハア…っ

ハア…っ



っっ！



あー…  
はやく  
蘭ちゃんに  
会いてえな…

アムタんとは  
お嬢ね…っは

不安不安

腰が痛いよっ  
おっおっ

## Drunk in Love

水上あいこ

「たっだいまあ〜」

玄関の扉を閉め、無意識に鍵も掛けたところで、立っているのが面倒になった俺はそのまま玄関先にぼたりと倒れ込んだ。

玄関へ続く扉を開けて、俺の様子に気づいたのか、俺のかわいい恋人がぼたぼたと駆け寄ってくる。

「大丈夫？ 快斗君!？」

膝をついて、仰向けに倒れ込んだ俺の顔を覗き込んで心配そうに言ってくれる。下から見上げてるせいか、光の加減のせいか、蘭ちゃんの背に天使の羽が見えた気がした。

そっかあ、やつぱ俺の彼女は、天使だったんだな。

「たっだいまー、蘭ちゃん!」

俺はへらつと笑って、そのまま手をのばし、彼女の肩を引き寄せるように抱きしめた。引き寄せた瞬間、蘭ちゃんの髪や体からふわりという匂いが漂った。

俺が蘭ちゃんと一緒にやなく、一人酒を飲んで帰宅したのは、友ららにコンパとやらに連れ出されたからだ。

もちろん奴らは、俺にかわいい彼女がいるのを知っているし、俺がどれだけ蘭ちゃんにベタ惚れで、彼女しか見えてないのを知っている。それどころか、

「あんなかわいーい彼女がいるくせに、女の子に騒がれてるなんて不公平だろ、一人くらい譲れ!」

などといつも言われるくらいだ。譲れと言われても、俺は蘭ちゃんしかいらねーし、知ったこっちゃない。

しかし、あいつらにしてみれば、猫の手も……というか彼女持ちのマジシャンの手も借りたのだそうだ。

気持ちにはわからなくもないが、俺にしてみれば、蘭ちゃんといちやいやする時間の方が遙かに大事だ。

高校の時と違って、今、蘭ちゃんは俺ん家で一緒に住んでるし、大学も一緒だし、一緒にいられる時間は増えたのだが、それでも離れてはいたくない。

彼女が笑ってくれるのを見るだけでもいい。あの心地よい声で、俺の名前を呼んでくれるのを耳にするだけでもいい。たわいもない言葉を交わすだけでもいい。もちろん、触れて、触れられて、溶けてしまいたいそうになるくらいの互いの熱を交わすのも。どんだけ時間があっても足りないくらいだ。

彼に、奴らが取った行動は、蘭ちゃんに直談判する事だった。

かわいいやきもちを妬いてくれた事もあるが（最っ高にかわいいのだ！）、基本蘭ちゃんは俺のことを信じてくれている。正確には、俺が呆れるくらいに蘭ちゃんしか見えてないのを知ってくれている。

しかも俺のマジックの腕も大好きだと称賛をくれていた。

だから、友人らの「黒羽のマジックが見たいって子がいるんだ」という卑怯な懇願に、彼女は嫌な顔を見せず、「それなら」と言ってしまった。

そして、今日。帰り、別れ際も「行ってらっしゃい」と笑って言ってくれた。その最高の笑顔に、「行かないでって言ってくれよ、蘭ちゃん」と切なくなりながらも見惚れてしまった。

今生の別れでもないのに、しつこく抱きしめて、何度もキスしてしまつたのも仕方ないと思う。いや、むしろ服の下に手を入れなかつたのを褒めてほしいくらいだ。

もちろん、怪盗としてマジシャンとして、ボーカーフェイスを忘れてはならない。

いくら乗り気ではなくても、場を乱すような事は、いつか客前に立つ身としてはご法度だ。これはステージの経験だ。

俺はそう言い聞かせて、数時間を乗り切るつもりだった。女性陣の憧れのコイバナとやらの話題が上がるまでは。



「らんちゃん、いい匂い」

そう言って、寝転んだまま、ぎゅううつと抱きしめる腕の力は緩むことなく、快斗君はなかなかわたしを放してくれなかった。

快斗君に抱きしめられるのは嬉しいんだけど、屈み込んだままの体勢としては少し苦しい。

快斗君からは、珍しくお酒の匂いがした。

今日、コンパのような集まりに行つたのは知っているけど、快斗君は今までお酒を飲んでもあまり変わる事はなかったから少し驚いた。

ただいまって抱き付くのはいつもの事だけど、もしかして酔つてるのかな？ 飲みすぎてるのか？

心配ではあるけど、頬を指り寄せて甘えるように抱き付く姿は、なんだかわいしいし、それが見られるのも嬉しい。

そんなことを考えていると、ようやく快斗君の腕の力が緩んだ。

わたしは少し体を起こして、もう一度、快斗君の顔を覗き込んでみる。さつきも見ようとしていたけど、すぐに腕の中に抱き込まれてしまつて、よくわからなかったから。

うん、顔色は悪くないみたい。お酒で陽気なだけかな？

目が合うと、また嬉しそうにへらっと表情が緩んだ。

「らんちゃんは今もかわいいなあ」

語尾が伸びたゆっくりとした口調で、快斗君がしみじみと呟く。

「ど、どうしたの、急にっ」

何を言い出すのかと口ごもってしまふ。

「急にじゃないよ。毎日さー、かわいくなつてさー、俺、すっげー

心配でさ……」

快斗君は、眩しそうに目を細めて、わたしの顔に手をのぼし頬に触れた。少し冷たい手の感触に心臓がどきりと震えた気がした。

「俺の、だからな……」

「え？」

「蘭ちゃん、どこにも行っちゃだめだからな」

快斗君は切なそうにそう言つて、なぜか後ろにまわした手で、わたしの背を撫でた。

「どうして？ ここにいるじゃない」

快斗君の声色がどこか遠く感じて、少し寂しくなった。

放したくないって言つてくれた。離れたくないって思った。同じ

想いでわたしはここにいます。

攫うようにのぼしてくれた手を取つたのはわたしだ。

快斗君に囚われて、一緒にいられる日常を望んだのはわたしだ。

こんなに近くにいられる毎日が幸せなのに、快斗君には見えてないのかと思うと寂しいじゃない。

「ほんとに……？」

「すがるように彼は続ける。」

「快斗君のそばにいますでしょう？」

いつもは恥ずかしくて泳がせてしまう目を、真っ直ぐ快斗君に向けて笑いかけた。

小さく頷いた快斗君に、少し笑顔が戻ってくる。

「な、蘭ちゃん。俺のこと……好き？」

「え？ も、もちろん」

「そうじゃなくてさ。俺のこと好き？」

もう一度問いかけられて、今、快斗君が求めている答えに気づいた。

「……うん」

だから頷いて微笑んだ。

「大好きだよ」

そう伝えると、快斗君の顔に眩しいくらいの笑みが広がった。

その笑顔に、心臓が小さく跳ねた。

こんな一言で、快斗君はこんなにも幸せそうに笑ってくれる。

快斗君が笑ってくれると、わたしも幸せな気持ちになる。

でも、嘘偽りない気持ちだけど、こんな言葉だけでは足りないくらいだけど、口にするだけでも恥ずかしくなってしまう。

落ち着かなくなつて目を少し逸らした瞬間、快斗君は勢いよく半身を起こし、わたしの体を力一杯抱きしめた。

ぎゅゅと力強く。まるで追い締められないとでもいうように。

「か、いとくん……苦し……」

「言つとくけど、俺の方が好きだからなっ！」

「……え？」

「俺の方が、ずっとずっと蘭ちゃんの事好きだからなっ！」

張り合うような勢いでまくし立てる。

「なにそれ……」

子供のような主張になんだかおかしさが込み上げて、くすぐずと笑つた。

でも嬉しい。快斗君が飾ることなく伝えてくれる気持ちが嬉しい。



快斗君は、抱きしめてた体を離し、不意に表情を消して、わたしを見つめてきた。

「ホントだって。もうさ、おかしくなるくらい好きで好きで、たまらない。俺がどんだけ蘭ちゃんのこと好きか、わかっている？」

や、やっぱり酔ってるのかな。真っ直ぐな眼差しと飾らない言葉は嬉しいのだけど、なんだか目が据わってるような気がして心配になってきた。

「ね、もう部屋に戻ろう？　ちゃんと休んだ方がいいよ」

「やだ」

「でも、こんな所じや体痛くなっちゃうよ？」

「まだ、足りない」

「……え？」

「まだ、蘭ちゃんが全っ然足りない」

快斗君はそう言っ、わたしの手を取った。

掴んだ指先を自分の口元に引き寄せ、目を閉じて恭しく口づける。

その仕草にきゅっと胸が高鳴った。

わたしの反応に、快斗君は笑みを浮かべ、指に、手の甲に何度も唇を押し当ててくる。

唇の感触も、どこか優雅なその仕草も、色気を感じさせる。

さっきまであんなに甘えていたのに、がらりと空気が変わってしまい、心臓が高鳴って目が離せない。

逆の手も、いつの間にか快斗君の反対の手に囚われていて、指を絡めるように繋ぎながら絶妙な感覚で撫でられている。

快斗君は口づけていた指をべろりと舐め、そして口に含んだ。

「ひゅっ……」

濡れた感触に驚いた次にはもう舌が指に絡みつき、ちゅっつと吸われていた。

ゆっくりと艶めかしく動く舌は、何かを呼び覚まそうとする。

「や、やめ……」

弱々しく首を振るも、手を引くことはできなかった。それどころか濡った舌が耳に届き、おかしい気持ちになってしまふ。

すると、快斗君は指を啜えたまま視線を上げて、にやりと笑った。

きつと、気づかされてる。そう思うと、全身がかつと熱くなった。

恥ずかしさで逃げたくなり、手を引こうとした時、ようやく快斗君は指を解放した。

「おいしい」

わたしの手を互いの眼前に示しながら、快斗君は笑う。

自分の指なのに、淫らに濡れていて直視できなかった。

「もつと、おいしいの舐めさせてよ」

快斗君はそう言っ、激かに身を乗り出し、わたしの唇を舐める。

甘いキスよりもどこか官能的な感触に、体がぞくりと震え目を閉じ息を呑んだ。

手を掴んでいた片手が離れ、頭の後ろにまわり強く引き寄せられる。唇に快斗君を感じた瞬間、すでに唇を舐つた舌がわたしの中にいた。

「んんっ」

髪に絡む指の感触、感じる場所をくまなく舐る舌の感触。

快斗君は角度を変え何度も貪るように口づけた。

「はっ……んんう……」

淫らな音を立て絡み合う唾液がいつもより甘い気がした。恥ずかしくなるような吐息が漏れる度に、快斗君から微かなお酒の匂いが伝わってくる。

心地よい酩酊感に包まれ、目眩がしそうになった時、快斗君の唇が離れた。

離れていく濡れた唇に、思わず見惚れる。

キスに酔い、息が上がり、頬が熱くなっているのがわかる。

わたしは力なく快斗君を見つめた。

「そんな目で見たら、どうなるかわかってんの？」

苦笑しながら快斗君が言う。何度も聞いた事がある、意地悪な声色。

「わ、わかんない……」

心臓をどきどきと震わせながら、首を横に振ると。

「嘘つきだな」

また、楽しげに笑った快斗君は、わたしの耳の辺りの髪をそつと後ろへ流し、耳元から首筋へと顔を埋めながら唇を押し当ててきた。すでに体の至る所が敏感になっていて、くすぐったさで小さく声を上げて反射的に身を振った。

「なんで逃げるんだよ、蘭ちゃん」

すかさず快斗君の不満げな声が降ってくる。

「だ、だって……くすぐりたいよ……」

「そう？ ホントは感じてんじやね？ 蘭ちゃん、この辺弱いもんない」

そう言っ、快斗君は目を輝かせながら、指で首筋の微妙なラインをそつと撫でた。

「……やつ、ちがつ……」

体が大きく震える。マジシャンの指は、わたしの弱い場所を的確に捉えていて、わたしを快楽の渦に引き込もうとする。

「違う？ じゃあ、こつちだっけ？」

快斗君はわざとらしく首を傾げ、手を首元からそつと胸元に降ろしていく。

服の上から、やわらかく円を描くように胸を撫で始めた。

「んっ……あつ……」

布越しのせいで快斗君の指がどこか遠くもどかしく、止めるはずの音が甘く震えてくる。

「だめ……こんな、とこで……」

頭の隅に微かに残っていた、まだここは玄関だという意識で、静止の言葉を絞り出す。

「ん？ こんなとこで感じてんのは、誰だっけ？」

快斗君はますます笑みを深め、耳元に口づけながら囁いた。

「感じて……なんかっ……」

強がってみるも、やわらかく揉みほぐす手のひらや指の感触が、衣服を通して伝わり、体がびくびくと震え出す。

「体は素直なものになー。ほら、ここが早く触って待つてる」

快斗君はそう言っ、胸の中心を引っ掻くように擦った。

「やああつ……」

止めなきやという意思に反して、快斗君を待ち望んでいたそこに触れられ、わたしは大きく背をのけ反らせた。

ふらついた体を、床に手を付いて防ぐ。

快斗君はわたしの体を引き寄せ、再び艶めかしく口づけた。

舌を絡ませながら、快斗君の片手は、器用にわたしが着ていた服のボタンを外していく。

応えるのが精一杯で、わたしはもう手を止めることができなかつた。

唇が離れると、快斗君は眩しそうに目を細めてわたしの体を見つめた。快斗君の手で、熱を帯びた体は淡く染まり、しつとりと汗ばんでいる。

緩慢な動きで、衣服に手をかけ開かされた前を再び隠そうとするも、快斗君に阻まれ、逆に肩から落とされてしまった。

快斗君はわたしの目を覗き込んで言った。

「どっちがいい？」

「……え？」

「指と口、どっちでして欲しい？」

「そ、そ、そんなこと……」

わたしは顔を赤らめてぶんぶんと首を左右に振った。

そんな事、恥ずかしくて考えられない。答えられるわけがない。

「言わないとこのままだよ？」

普段も楽しそうにからかってくるけど、今日の快斗君はいつも以上に意地悪だ。

高められて熱を持ち、快斗君に触られる事を望んでしまっている体が、疼くようで辛かった。快斗君の問いかけは、手で、口で、今までに触れられた記憶を呼び覚ましさらに淫らな気持ちにさせた。

「ど、どっちも……」

どう触れられても気持ちよくて、おかしくなるだけなのに。どちらかなんて考えられる余裕なんてないのに。無意識に零れ落ちた言葉に、快斗君が嬉しそうに笑う。

「欲張りだな、蘭ちゃん」

そう言っただけ、胸の先端で震える固く膨らんだ蕾を、片方は指できゅっと摘み上げ、もう片方は口に咥えて強く吸った。

「やあんっ！」

まだ服の上からやわらかく触れられてたもどかしさから一転、両方に与えられた強い刺激に耐えられず、高い声上がる。

熱く湿った舌が絡みつき、指も時々押しつぶすように撫で回してくる。

そういう意味じゃなかったのに……否定したくて、弱々しく首を横に振る。

「ち、がう、のお……」

だけど唇から零れていくのは、甘ったるく、ただ欲しがるとような声。

快斗君は口を離して、わたしを見上げた。すべてを見透かしたような目でくすりと笑う。

「嫌わないだろ？　ここ、嬉しそうに真っ赤じゃん？」

そう言いながら、快斗君の唾液で濡れた場所を指で突いた。

「あああっ！」

「ほら、また声がかわいくなっただけ」

快斗君は満足げに笑って、再び胸元に顔を埋め逆の膨らみを口に頬張った。

「んっ！」

わたしは淫らに濡れてしまう声を聞かれるのが恥ずかしくて唇を噛んだ。

快斗君は、手のひらで握るように胸を揉みながら、先端を何度も甘噛みした。まるで、わたしの声を引き出すように、何度も執拗に愛撫する。

「ん……んう……ああっ……」

どんなに隠そうとしても、快斗君には敵わない。声を抑えようとする度に、彼の指を、舌を鋭敏に感じて我慢できなくなる。

声を上げても逃がしきれない、甘く痺れるような感覚が体中に広がりがり力が入らなくなる。わたしは後ろに倒れてしまいそうになる自分の体を支えられず、震える手で快斗君の肩にしがみついた。

ずっと胸を愛撫していた唇が名残惜しげに離れ、胸の谷間に、首元に、顎の裏にと昇ってくる。

時々、痕をつけ甘い痛みを残したそれは、わたしの唇にたどり着き、ちゅつと音を立てて啄んだ。

優しく触れるだけの感覚が……。

「気持ちいい？」

見透かしたように快斗君が優しく笑いかける。

全部知られてたとしても、恥ずかしさは拭いきれず、視線をさまよわせながら小さく頷いた。

「やっべ……かわいい」

快斗君はわたしの体をやわらかく抱きしめ、「もつとしよっか」と囁いた。

わたしも応えるように、快斗君の首に腕をまわして抱き返した。

まだ快斗君のシャツ越しではあるけど、快斗君の体も熱くなっているのが伝わってきて嬉しい。

快斗君はゆっくりと手を背中に這わせ、片手を腰に下ろしていく。腰を床に下ろしていたから、閉じられていたままだった脚を、前にまわった手で大きく蹴げられる。

着ていたスカートは腰までめくれ上がり、そこから侵入した快斗君の手が太腿を撫でまわす。

「ん……あぁっ……」

屈きそうに屈かないもどかしさに、腰が小さく揺らいだ。屈きそうに屈かないもどかしさに、腰が小さく揺らいだ。

快斗君の指が、下着の上から中心を強く押した。

「あぁん」

高く甘えるような声が大きく響く。

下着が張り付く感覚、そして、指で撫でられた時に微かに響いた淫靡な水音で、自分がどれだけ濡れているのかわかってしまった。

キスをして、胸を愛撫されただけで、こんなにも淫らな蜜を湛え悦んでいるなんて。

「蘭ちゃん、もうこんなに濡れてんだ？」

それなのに快斗君は、わざわざ恥ずかしい事を口にする。

「も……おね、がい……」

わたしは俯いて、力無く首を横に振って言った。

無意識に出た言葉が、言わないで欲しいからか、それとも早く触れて欲しいからか、自分でもわからなかった。

確かなのは、羞恥で逃げだしたくても、体は熱く疼くように震え、

快斗君を求めてしまっているという事。

快斗君の指が、下着の中へと溜り込んだ。

「んあっ……」

指はぬかるんだ蜜を絡めるようにさまよい、そして、中へと沈んでいく。

「あっ、あぁぁ……」

指が奥へと進む度に、ぐちゅつと淫らな音を立てて、中から蜜が零れ落ちるのが自分でもわかってしまう。

快斗君を離したくないと、締め付け抱きしめているのも。

「うわっ……ぬるぬるだ……」

ゆっくりと指を抜き差ししながら、挿入するような、でも嬉しそうな快斗君の声が届く。

「やっ……あんっ、んんっ！」

快斗君の指が感じる場所をなぞると、声が抑えられなくなり、思わず自分の手で口を塞いだ。だけど……。

「隠すことないだろ？」

すぐに快斗君に、その手は外された。

一度緩やかになった指の動きに、深く息を吐く。

「はぁ……だっ、て……恥ずかし……」

「めちゃくちゃエロくて、かわいいんだからさ、全部聞きたい」

快斗君は中に埋め込んでいた指を激しく突き上げ始める。

「あっ、やぁあっ!!」

手で塞ぐことができなくなった嬌声は、あっけなく快斗君によって引き出されてしまった。指の動きに呼応するように、ぐちゅぐちゅと淫靡な音を立てる場所に、もう一本の指が滑り込む。

二本の指がわたしを快樂の高みへと押し上げていく。体の奥から快斗君を求めするように溢れ出す愛液が、ますます淫らな音を立てた。

「あんっ、ああっ、やっ……！」

思考が溶け始め、感じるがまま声を上げ、腰が自分の意思では屈かない所で、びくりと何度も跳ねた。

もう……気持ちよくて、おかしくなってしまうそう……。

「蘭ちゃんの、ここ……おいしそうに、啜え、てんな……」

からかうような快斗君の音が、ますますわたしを追い詰める。

「やっ、んっ……そんな……」

自覚している事を指摘されて、言わないでと首を振ることしかできない。

「指でこうだと、俺の入れたらどうなるんだろうな」

快斗君の……？

喜悅を含んだその言葉に、いつも抱き合う時を、深く繋がるあの瞬間が頭を過ぎった。

大きくて……固くて……わたしの中が快斗君でいっぱいになる瞬間の……。自分の思考の遅らさに体がかっと熱くなった。

「あっ、んっ、あああああ！」

わたしは快斗君に深く貫かれた感覚に陥り、そのせいで、彼の指をぎゅうつと締め付けながら達してしまった。

全身が硬直した後、すべての力が抜けて崩れ落ちそうになった体を、快斗君が支えてくれた。わたしは快斗君の胸に寄りかかり、乱れた息を整えるように呼吸を繰り返す。

「あれ？ イッちゃった？」

押論ではなく、本当に驚いているような口調。

自分だけ、こんなに簡単に達してしまふなんて……と泣きそうになった。

「……恥ずかしい？」

それに気づいたのか、快斗君は、わたしの顔を覗き込んで言う。

「だって、わたし……ぼっかり……」

快斗君に狂わされて、与えられるまま感じて乱れる姿を全部さらけ出して……。

「蘭ちゃんだけじゃないよ。俺だって——」

快斗君に捕らわれたわたしの手が、快斗君自身に導かれる。その感触に思わず息を呑んだ。固く、熱く……服の上からでもその存在は、はつきりと伝わってくる。

「言つただろ？ 好きで……どうしようもなく好きでたまんないっで。蘭ちゃんの前だと、俺、なんも制御できなくなる」

「……かいと、くん……」

「蘭ちゃん……」

そつと濡れた両手を頬に触れさせ、快斗君がわたしの名を呼んでくれる。その声も、愛おしさに満ちていて、胸が締め付けられた。

「蘭ちゃんの全部、俺にくれよ」

そして、こんな風に真っ直ぐな瞳でいつも心を揺さぶってくる。

「無理……だよ……」

「……え？」

快斗君の声が不安げに揺らいだ。

わたしは快斗君に手をのぼし、ぎゅつと抱きしめながら言った。「もう全部、快斗君に盗まれてるもの……」

求めてくれる想いが嬉しい。

その想いに、心も体も翻弄されて、拭いきれない羞恥も、照れ臭さも、最後には全部快斗君に奪われて溶かされてしまう。抗えないのはわたしも好きだから。

「脅かすなよ……」

快斗君は安堵したように息を吐き、わたしの体を強く抱き返した。隙間なく合わさった体は熱く、とくとくと鼓動が震えている。まるで、もつと欲しいと伝え合ってるみたいに。

「蘭ちゃん」

快斗君が口を切る。

「こんな場所で悪いけど、俺、もう部屋までもたない……入れていい？」

今まで部屋に戻ろうと言っても聞いてくれず、着ていた物もほとんど脱がされて、散々声を上げて濡れてしまうまでされてしまったのに、今さら？ ほんの少しだけそう思ったけど、もうもたないのはわたしも同じだった。だから、わたしは頬を染めて頷く。

互いに腰を下ろした状態で向き合ったまま、快斗君の両腕がわたしの腰を抱き、引き寄せていく。

「あ……んっ……」

ゆっくりと髪を掻き分けるように快斗君が入ってくる……。

「ナカ、あつっ……」

快斗君の息も乱れ、苦しげに肩を寄せている。

達した後の敏感なそこは、指とは違う確かな存在を抱きしめ、悦びに震えている。

奥に届いた瞬間、背筋が痺れるような快感が走り抜けた。

快斗君はわたしの体を支え、顔を近づけた。唇をやわらかく重ね合うと、互いにすぐに口を開き、欲する気持ちのまま、口内を舐り合う。

目を閉じ、体を揺り寄せ、呼吸をするのも忘れたかのように何度も、何度も。深く口づけながら、快斗君が腰を揺らし始めた。

「んむっ……んん！」

唾液が絡む音と、繋がった場所から溢れる粘ついた水音が、絡み合うように響く。キスが離れ、快斗君は首筋に顔を埋め口づけながら、強めに腰を押しつけてくる。

「あんっ、ああっ……！」

快斗君が動く度に、自分の中を熱いものが擦り上げていき、快斗君が中にある事をあざやかに伝えてくれる。深く繋がっている事が嬉しくてたまらない。

だけど、体勢のせいなのか、その動きはいつもより緩やかで、まるで焦らされてるよう。

もつと欲しいと口走りそうになり、必死に唇を噛んだ。

「蘭ちゃん、ごめん……」

快斗君は突然動きを止めて、そう低く吐き出し、背を支えながらわたしの体を後ろへとそつと押した。

二人の体が、床へと倒れ込む。快斗君に支えられていたから、痛みは感じないけど、背にあたるのはいつもと違う床の感覚。

欲望のままこんな処で絡み合うなんて、どれだけ猥りな姿なんだろう。だけど、そんな思考さえも、今は熱情を煽るだけだった。

「やっぱ、背中……痛い？」

「ううん、平気……」

安心して欲しくて、微笑んだ。

快斗君がくれるものは、いつも優しい。

する時、強引だったり、意地悪だったり、恥ずかしいと言っても止めてくれなかったりするけど、痛みなんて感じた事はない。

むしろ全身で愛してくれから、感じるのは快樂と至福ばかり。

「蘭ちゃん、俺の事甘やかしすぎ」

快斗君は苦笑した。

そして、着ていたシャツを脱ぎ捨て、わたしに覆いかぶさるように抱きしめてくる。

今までシャツに阻まれて屈かなかった熱い肌に包まれ、愛おしさが募り、わたしも抱き返した。

「かいと、くん……あつ……」

「蘭ちゃんも、な」

お互いにもつと近くにと願うように隙間なく体を合わせ、快斗君は再び腰を揺らし始めた。

「あつ、あんっ……んんっ……」

さつきと違う角度で突き入れられ、また感じるがまま、勝手に甘い声が唇から零れ落ちる。

ぐちゅぐちゅと淫らな音を立てて蜜が溢れ出し、二人の息が熱く乱れ始める。

「蘭ちゃんの……すげ、絡みついて、くる……気持ちいい？」

耳元で囁かれた言葉に、体が大きく震え、無意識に何度も頷いた。

快斗君は満足げに笑い、膝裏に手をかけ、脚を床に押し付けるかのように大きく抵げた。そのせいで腰が高く持ち上がり、快斗君がもつと奥まで届く。

「やつ、ああああつっ」

激しく最奥を何度も突かれ、首を振って喘いだ。

溢れ出した蜜が繋がった体を濡らしながら流れ落ちていくのを感じる。充分に感じているのに、それでももつと欲しくて淫らに腰が揺れる。

「あつ、ああつ、かい、と……くんっ、ああつっ！」

快樂に溺れ、何度も快斗君の名前を呼ぶ。

「蘭ちゃんっ！好き、だっ……俺の……」

快斗君の荒く乱れた声も、何度もわたしを呼んでくれる。

普段、あまり見ることがない、余裕を無くした快斗君の表情が愛しい。

「あんっ、あつ、あつ……も、だめえ……」

逞しい腕に抱きしめられ、体の芯が燃えるように熱い。

腰の動きは速くなる。中は快斗君に絡みつき、抵げられた脚は小刻みに震え、また達してしまいう予感がある。

「んっ、かいと、くんっ、いっしょ……にっ」

わたしは息も絶え絶えにねだった。

一人では寂しかった。今度は、快斗君と一緒にいいから。

快斗君は、まるで日常のような優しい笑みで、頬に口づけを落とす。

心臓が大きく震え、中で轟く快斗君をぎゅっと抱きしめる。

快斗君は、最後へと導くため決るように中を掻き回し、一番深い所へと突き入れた。

「んっ、ああああ!!」

体の奥で、快斗君の熱が放たれたのを感じ、わたしは大きく背を反らしながら、再び絶頂に達した。



蘭ちゃんの前で、ボーカルフエイスなどできないと自覚していたが、俺は自割心もないらしい。

たかだか酒に酔ったくらいで、自分の事を好きか聞き出したり、強引に迫ったり、固い床に押しつけるように組み敷いたあげく、めちゃくちゃに突きまくったり、それでも足らずに二度目は後ろからも入れたし。

部屋のベッドに移動はしたが、何度も何度も抱いて、気を失うように眠ったのは明け方だ。

隣ではまだ蘭ちゃんが眠ってる。

起こさないように静かに手をのびし、髪に、頬に触れる。

昨夜「明け方もか？」抱いてる時は、あんなにエロく乱れてたのに、今はまた違う清楚な表情。

「大好きだよ」

強引に求めたからだけど、蘭ちゃんが伝えてくれた確かな言葉。

蘭ちゃんの声が、微笑んでくれたその表情が、俺を包み込んでくれてどれだけ嬉しかったか。……そこから暴走が始まったのだ。

うん、あれはやばかった。

蘭ちゃんの笑顔の破壊力はハンパなかった。

さらに、俺の手に狂うように感じてくれて、どこに触れても気持ち良くて、場所を愛える余裕なんてなかった。

俺は寝てる彼女の背中をそつと撫でてみた。

痛かっただろうな。

それなのに、彼女は俺のわがままも、全部受け止めてくれる。

触れた手の感触が、眼りを妨げてしまったのか、蘭ちゃんの目がそつと開いて、俺を捉えた。

恥ずかしそうに視線をさまよわせ、頬を赤らめる。

きつと、昨夜の事を思い出してるんだろう。

「おはよ、蘭ちゃん」

そう言っただけで彼女に笑いかける。

彼女は、毛布で半分顔を隠し、消え入りそうな声で「おはよ……」と返した。

なんてかわいいんだ、と笑い崩れながら、朝には遅い時間だから、お腹空いてないか聞いてみると、彼女は大丈夫と答えた。

「なら、もう少し寝てなよ。後でメシ作っておくから」

「……うん」

よつほど疲れが残っているのか、彼女は珍しく素直に頷いた。

「体とか、どつか痛くないか？」

「え？」

「背中とか……ほら、床だったし痛かっただろう？」

蘭ちゃんはますます頬を染めて、首を横に振った。

「なら、いいけど……」

また背中を撫でると、蘭ちゃんが、そつと顔を上げて言った。

「……どうかしたの？」

「え？ なにが？」

「昨日、帰って来た時も背中撫でてた……何かあったの？」

昨夜、ぼんやりとした意識の中、目に映った幻想を思い出した。

「何かあってほどじやないけど……笑わない？」

「う、うん……」

「蘭ちゃんの背中に、天使みたいな羽が見えたんだ」

俺の発言が奇想天外すぎるのか、蘭ちゃんは不思議そうに目を丸くした。

「綺麗なんだけど、その羽で、どこか帰るべき所に帰ってしまいそうだと思うてさ」

「……………」

「俺は、蘭ちゃんをいられて、愛して愛されて幸せだけど——」  
蘭ちゃんはそれでいいのか？ といつも思う。



彼女の運命を狂わせて、自分の元に留めさせてしまった。彼女の本当の幸せを願うなら、手を放すべきじゃないか？

脳裏に昨夜の記憶が蘇る。

強引に巻き込まれた酒の場で、女性陣の好みのタイプだとか、俺にはよくわからない話題から始まり、その流れで今流行ってるという映画について盛り上がり始めた。

「あれ、幼なじみで、ずっと想い合ってた最後は結ばれて結婚だなんて、素敵だよー」

「二人の間に色々あるけど、引き裂けない運命ってあるのよ」

「でも、主人公にずつと恋してる友人の男性もかっこよくない？」

「そう！ 悩んでる彼女の背中を押してあげてさー」

盛り上がる女性陣と、はしゃぐ彼女らに見とれる男たちには悪いが、聞きたくない言葉が飛び交っていて、苦々しいものが胸の中に広がった。

俺には関係ない話だ。

蘭ちゃんに恋して俺は焦がれるように彼女を求めた。蘭ちゃんも俺を好きだと言ってくれて、俺の手を取ってくれた。

蘭ちゃんは俺のだ。

あの微笑みも、肌を合わせるあの熱も、これからの未来も全部俺のだ。……だけど、過去だけは俺の物にならない。彼女のすべてが欲しいのに、それは叶わない。

蘭ちゃんのそばにいれば、彼女が俺の名前を呼んで微笑んでくれれば、こんな事考えずにすむのに、と無性に腹立たしくなって、酒の量が増えていた。思えば、何も考えず、ごちゃ混ぜで飲んだのが悪かったんだと思う。

「でも、蘭ちゃんが、どこか帰りたいって言っても、俺はもう離してやれないかもしれない」

彼女は哀しそうに俺を見つめ返した。

「快斗君は、離れたいって思ってるの？」

「いや、それができないって話で——」

「いいよ、離れても」

俺の言葉を運るように、彼女は毅然と言う。

拒否られたかと思いい、一瞬胸が痛んだ。だが、違った。

「快斗君が離れても、わたしが追いかけて捕まえるんだから。快斗君が嫌だって言っても、もう離れてやらないんだから」

「らん、ちゃん……」

「どこに帰りたいって思うの？ わたしは、快斗君のそばに帰りたいし、快斗君にも帰ってきて欲しいのに」

嘘だろ？ 俺は自分ばかりが彼女を望んでると、押しつけてると思ってるのに、なんでそんな事言ってくれるんだ。

胸の中が愛しきでいっぱいになった、言葉が出なくて、俺は黙って彼女の体を引き寄せ、包むように抱きしめた。

お互いにまだ何も着ておらず、直接触れた肌が彼女自身のようなぬくもりを伝えてくれた。

「ありがとな、蘭ちゃん」

みっともないとこ見せて、なんだか照れ臭くなって、つい誤魔化すように口走る。

「でもさ、そんな事言っても蘭ちゃんは根本的に優しいから、嫌だって言われたら無理強いできなさそうだよな」

「なにそれ……」

彼女がかわいらしくむくれる。

「じゃ、快斗君は嫌だって思うかもしれないって事よね？」

「違うっ!!」

思わぬ反撃に、慌てて否定する。

「俺がそんな事思っただけじゃん！　こんな好きなのに！」

「口ではそう言ってくれるけど、心の中はわからないでしょう」

「だから、違うって!!」

俺は思わず体を起こし、彼女を組み敷いた。見上げてくれる彼女を真っ直ぐに見つめる。

「蘭ちゃんしかいないんだ」

他の何を失ってもいい。こんなにも誰かに強い想いを抱いた事なんてない。

幸せになって欲しいとか、愛して欲しいとか、本当にこれでいいのかとぐるぐる悩むくせに、たどり着くのはここなんだ。

蘭ちゃんが何も言ってくれないので、「やっぱ証明するしかない？」

と、顔を近づけた。唇を重ね合う。やわらかい彼女の唇が気持ち良くて、舌でなぞると、かわいらしい吐息が漏れた。

背中がぞくりと震え、深く求めようと唇を割って中に忍び込ませる。蘭ちゃんが、すがるように俺を抱きしめて、応えてくれる。

夢中でキスを交わしていると、彼女の瞳から溢れ出した涙が零れていくのに気づいた。

驚いて、顔を離して彼女を見つめた。

「は、離れない、で……」

涙をぼろぼろと流し、言葉を詰まらせた、蘭ちゃんのか細い声が響く。

「やだ……どこにも、行かないで……」

「らんちゃん……」

あんなに毅然としていたのに、蘭ちゃんは堰を切ったように泣いていた。俺のために流す彼女の涙に、胸を抉られた。

同じだ。俺が蘭ちゃんを失う事を何よりも恐れているように、蘭ちゃんだって、驚いだ手を放されるかもと不安なんだ。

俺はなんてバカなんだ。俺が守らなきゃいけないのに、自分の不安を押しつけるだけで、いつも彼女の気持ちには鈍感だ。

止まらない涙を拭い、俺は彼女の目尻に何度も口づけた。

「どこにも行けないよ。もう、蘭ちゃんに全部盗まれちゃったからな」

安心して欲しくて笑いかける。

昨夜自分が言った事を思い出したのか、蘭ちゃんは頬を赤くした。少しだけ、笑ってくれたみたいだ。

「ごめんね。こんな過激な事したくないのに……」

申し訳なさそうに言う彼女がかわいらしい。

「蘭ちゃんが、そんな事できないって知ってるから大丈夫だよ」  
そう言うと、彼女はますます赤くなって「もう」と小さく呟いた。

俺は再び彼女に口づける。  
角度を変え深く絡ませると、まるで酔ったように彼女も応えてくれる。

いや、違う。酔っているのは俺の方だ。  
蘭ちゃんに出逢って、蘭ちゃんに恋してから、俺は彼女にずっと酔っている。

酔っている。

まだ昼前だけど、昨夜も何度もやったけど、また感情が昂ぶってしまった俺たちは、また想いを確かめ合うように体を絡ませた。さっと、朝食はもつともっと遅くなってしまいうに遅くない。

end